

今日は「大寒」、一年でいちばん寒さが厳しくなるころとのことです。少しずつ春に向かっています。

現在会員登録数 4,619 人さま。次号は 2 月 20 日発行の予定です／

+ ----- ◇◆◇ 目次 ◇◆◇ ----- +

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する ※今月は休載です

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行ってきました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

《6》富安陽子 腕だめし STORY COMPE. 2025

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

+ ----- +

■----- ■
【1】お知らせ

●『寄付プレゼントキャンペーン 1月31日まで』

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力くださいますようお願いします。

キャンペーン期間中、1万円以上ご寄付いただいた方に、「特別プレゼント」として下記の中からおひとつプレゼントいたします。

◇プレゼント内容：

〈1〉富安陽子さんのサイン本 1冊（限定 15 冊・抽選）

〈2〉イイクロちゃんグッズ 全種類セット

〈3〉当財団発行のお好きな報告集 1冊

今回は、金額にかかわらず、ご寄付いただいた方全員を対象に、抽選で、「誰にでも当たるプレゼント」もあります。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）=継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

●第 20 回国際グリム賞 贈呈式・記念講演会

講 師：受賞者 エマー・オサリバン博士

（ドイツ・ロイフアナ大学リューネブルク教授）

演 題：『不思議の国のアリス』を絵で表す

－記号間翻訳としてのイラストレーション－

日 時：2 月 7 日（土） 14:00～17:00

会 場：國民會館 武藤記念ホール（大阪市中央区大手前 2-1-2）

定 員：70 人（申込先着順） 参加費：無 料

主 催：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団／

一般財団法人 金蘭会／大阪府立大手前高等学校同窓会 金蘭会

※お申し込み、詳細は ↓ ↓

http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/01_grimmi/index.html#20ceremony

● 「広松由希子と土居安子のゆったり まったり ぶっちゃけ絵本トーク」
http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#2025ehontalk

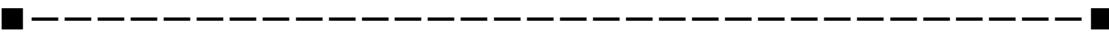
1月17日（土）、オンラインで開催しました。

絵本評論家・作家の広松由希子さんと、土居安子総括専門員が2025年に読んだ絵本について2時間たっぷり語り合いました。

◇録画配信 1月28日（水）～3月3日（火）

◎定員なし ◎視聴料 1500円

※お申し込みは Peatix から <https://2025ehontalk-2.peatix.com/>



【2】コラム



『1』この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

『わたしのおとうさんのりゅう』 伊藤比呂美/著 左右社 2025年10月
対象年齢：大人

* 今回のゲストは当財団理事の宮川健郎さん（T）です。

概要：詩人伊藤比呂美の両親、特に戦後一時期やくざを経験した父親の思い出を語った本。両親の経歴を調べ、大正11（1922）年生まれの父と大正14（1925）年生まれの母が「戦中・戦後」をいかに生きてきたかを想像する。それと同時に、伊藤の子ども時代に出会った児童書を紹介し、子ども時代の読書体験と現代の視点で読み直した作品に対する考え方を述べている。

T：この本は、お父さんが小さな印刷屋で働いていたことで、伊藤さんが『エルマーのぼうけん』（ルース・スタイルス・ガネット/さく ルース・クリスマン・ガネット/え わたなべしげお/やく 福音館書店 1963年7月）の初版の校正刷りをお父さんに読み聞かせてもらったというエピソードから始まります。「私は、この本を日本で初めて読んだ子どもです。」（p.4）と書かれています。渡辺茂男さんの息子の鉄太さん（1962年生まれ）はまだ小さいから、きっと伊藤さんが最初でしょう。とても興味深く読みました。

Y：この本のタイトルは、「わたしのおとうさんのりゅう」で、これは、『エルマーのぼうけん』の原書のタイトル「My Father's Dragon」から来ています。渡辺さんは、父親のエルマーについて語る人物を「ぼく」と訳されていますが、「わたし」であった可能性が語られていて「なるほど！」と思いました。

T：タイトルからは、この本が著者の父親に読んでもらった思い出の本であることと、『エルマーのぼうけん』をはじめとする児童書の思い出を語っている本であるということが読み取れます。

Y：そして、「ぼく」か「わたし」か、ジェンダーの問題についても考えさせてくれます。

T：実は、ぼくは、伊藤比呂美さんと同じ年に生まれ、地域は違うものの、同じ東京都板橋区で育った点も共通しているので、本に書かれている経験をとても身近に感じながら読みました。

Y：児童書にかかる点ではどんな点がおもしろかったですか。

T：『エルマーのぼうけん』でも、原書と翻訳の比較分析がおもしろかったです。これもお父さんに読んでもらったという『ドリトル先生アフリカゆき』（ヒュー・ロフティング/作 井伏鱒二/訳 岩波少年文庫 岩波書店 1951年6月）の翻訳文体の分析に「なるほど！」と思いました。

Y：「地の文が異様なほど単調」で、「ました」で終わる文が、延々とつづい

てゆきました。」とあり、「「ました」が、低い、きまったく調子で、どこまでもぶんぶんとうなりつづけていくようでした。ところが先生や動物たちの会話になるや、単調さの沼の中から、声や声や声たちが一斉に立ち上がり、響き合い、それはすぐ耳元から聞こえてくるように感じました。」(p.38~39)とあります。

T：さすが詩人です。これまでこんな分析は読んだことがないように思います。

Y：「昭和の文体 少年少女世界名作文学全集」の項の「昭和の児童書における無機質な文体」(p.101)の分析もどきどきしながら読みました。

T：そこで指摘されている浜田広介の文体に対する子どものときの快感と違和感も、それについての大人になってから考察も的確です。

Y：「メアリー・ポピンズ」も「シートン動物記」についても自分の子どもの頃読んだ感覚と照らし合わせながら読みました。

そして、それらの分析が分析に終わらず、子ども読者としての伊藤さん、大人になった伊藤さん、お父さんやお母さん、日本社会における言葉やジエンダーの問題などと絡み合いながら書かれている点がこの本の魅力だと思いました。

T：お父さんの足跡を丁寧に調べる過程も読み応えがあります。何より、伊藤さんがご自分や家族を客観的に見る視点の大胆さがこの本の起点にあると思いました。

『2』イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

※今月は休載します。

『3』子どもの本の珠玉のことば 79

茶色の大地が空から降ってくるのだった。

土埃があたしの胸をしめつけるので息もできなかつたけど
立ちどまろうとも思わなかつた。

土砂が降りしきって

目をひっかき

やわらかい皮膚につき刺さつた。

鼻をふさぎ

口の中が泥だらけになつた。

どんなに強く口をむすんでいてもだめだつた。

舌には泥のすじが縦横にできた。

（「土嵐 March 1935」より 『ビリー・ジョーの大地』 カレン・ヘス/作
伊藤比呂美/訳 理論社 2001年3月 p.185-186）

対談でとりあげた詩人伊藤比呂美の児童書の翻訳書です。「訳者かいせつ」によると、舞台は、大恐慌時代である1930年代のアメリカのど真ん中であるオクラハマ。大平原のまっただ中、干ばつ、日照りがかさなって、ダストボウル（土嵐）とよばれる災害が起こった場所です。

そこに両親と14歳の少女、ビリー・ジョーが住んでいます。とうさんがいくら働いても、3年間小麦は育たず、収穫はありません。ビリー・ジョーは成績優秀ですが、かあさんは、「やっぱりね」と言うだけで、励ましの言葉はありません。家にはとうさんからかあさんへの結婚プレゼントであるピアノが

あり、ビリー・ジョーはピアノを弾くことに夢中です。けれど、かあさんはビリー・ジョーがピアノを弾くとなぜか、機嫌が悪くなります。

かあさんは妊娠し、家族は厳しい毎日の中でも赤ちゃんを楽しみにしていますが、事故によってかあさんと赤ちゃんは死んでしまい、ビリー・ジョーも手におおやけどを負います。どうさんと二人きりになってからの日々にも土嵐は襲いかかります。引用の部分は、ビリー・ジョーが一人でコンサートから帰る時に土嵐が襲ってきた様子を描いています。「もしあたしが帰らないと／父はきっと探しに出るだろう。」と思ったビリー・ジョーは死に物狂いで帰宅します。詩のような文による身体感覚に訴える土嵐の描写がリアルで、「これでもか、これでもか」と襲ってくる自然の猛威と母親を亡くし、父親との心の交流に飢えているビリー・ジョーの絶望的な気持ちを見事に表現しています。

25年ぶりに読み返し、今の10代の子どもたちにもぜひ、読んで欲しいと思いました。(Y)

《4》 行ってきました！

大阪歴史博物館で4月6日まで開催されている特別展示「郷土玩具が好き 風土と造形の愉しみ」に行ってきました。博物館所蔵の全国の郷土玩具約100点が、素材やモチーフ、造形に込められた祈りに注目して展示されていました。

部屋の中に入ると、まずは「郷土玩具ってなに？」という説明がありました。そこには、「郷土玩具とは、日本各地で生み出されてきた素朴なおもちゃです。身近な「素材」で作られ、さまざまなかたち」をしています。それらのおもちゃには、地域の民間信仰や習俗を反映した「願い」が込められています。」と書かれています。そして、「素材」や「かたち」に注目しつつ、馬や達磨や妖怪などの郷土玩具がモチーフごとに展示され、作られた目的などの解説が付されています。

「素材」としては、土、紙、藁、木材、竹、かいこの繭などの自然な素材が使われ、「願い」としては、無病息災、魔除け、豊作、航海安全、安産、縁起などがこめられています。どれも素朴で、あたたかい感じがして、手にとつてみたくなりました。

特に、張子の虎や、赤べこなどは、子どものころ、首が揺れるのを見飽きなかったことを思い出しました。また、からくり人形、引き車などの動かせるおもちゃは楽しそうで、動かして遊びたくなりました。河豚土鈴と河豚笛は、丸い形と河豚の大きな目が特徴的で、音を鳴らしてみたくなりました。素朴な土人形も多く展示されており、伏見人形や、稻持鶏、千疋猿などの住吉土人形は、見たことがあって懐かしい気持ちがしました。

多くの玩具が宮脇コレクションからでした。博物館のHPによると京扇子「宮脇賣扇庵」のご主人が戦前・戦後に収集した郷土玩具のコレクションのこと。宮脇氏が昭和35年11月16日に亡くなつたあと、1万点あまりあるコレクションの中の1000点余りが大阪歴史博物館の所蔵となったと書かれています。集めること、保存することの大切さを改めて感じた展示でした。(K)

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学学者たち 第26回

第6章 鳥越信先生

その1 三つの児童文学史展（上）

1979（昭和54）年11月、鳥越信先生（1929～2013年）が監修した児童文学史展のお手伝いで、鳥越先生といっしょに沖縄に行きました。私は、1年浪人して入学した大学院の1年次で、24歳でした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

《6》富安陽子 腕だめし STORY COMPÉ. 2025

2つのキーワード「パン」「ワニ」を入れた、子どもを読者対象とした創作童話を募集中です。

◎応募期限：2月2日（月）

◎締め切り後、富安陽子が選考し、投票用の5～6作品に絞ります。

投票用作品は、作者名を伏せて、N0.186（2月20日発行）で発表します。

作品を読んだ人は「これが一番面白い！」と思う作品に投票してください。

◎上位2位の発表は、N0.188（4月21日発行）で行います。

この時に作者名を公表し、富安陽子がコメントを添えます。

富安陽子の参考作品も公開しますのでお楽しみに！

<詳細、応募方法はこちらをご覧ください>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe.html

■-----■

【3】全国のイベント紹介

■-----■

●講演会「日本の絵本100年100人100冊と最近の絵本」

講師：広松由希子（絵本評論家、作家）

日時：3月7日（土）14:00～16:00 定員：50人 参加費：無料

会場：吹田市立中央図書館

主催：吹田子どもの本連絡会

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■-----■

【4】プレゼント

■-----■

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『わたしのおとうさんのりゅう』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A>
締切は2月10日(火)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |
— | — | — | — | — | — | — | — |

長い正月休みも終わり、日常生活がスタートしました。年々、月日の経つのが早く感じられ、もう2月、そして年度末を迎えます。体調管理に気を付けて毎日を送ろうと改めて思いをいたしております。今年もどうぞよろしくお願ひいたします。(T A)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

- このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。
 - 配信の登録・解除・変更は、
http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html
 - このメールの送信アドレスは配信専用です。
 - 記事の無断転載はご遠慮ください。
-
-

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>
〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内
TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp
